

復旧現場の様子語られる

震災対応の情報共有の場に

建設トップランナー倶楽部

建設トップランナー倶楽部（和田章代表幹事）は15日、「東日本大震災現場からの証言」と題したフォーラムを東京都内で開いた。全国から400人あまりが参加し、復旧現場に携わっている企業などから報告を受けた。

開催に先立ち志多充吉建設部会長は「東日本大震災から学んだ課題など情報共有する必要があると感じた」と同フォーラムの趣旨を述べた。これに続き、和田代表幹事は「報告の機会を得なければ、仲間が何をやっているのかが分からない。この機会を有意義なものにしてほしい」とあいさつした。



立ち見が出るなど関心の高さをうかがわせた

開催に先立ち志多充吉建設部会長は「東日本大震災から学んだ課題など情報共有する必要があると感じた」と同フォーラムの趣旨を述べた。これに続き、和田代表幹事は「報告の機会を得なければ、仲間が何をやっているのかが分からない。この機会を有意義なものにしてほしい」とあいさつした。

順などが報告された。実際の復旧現場に携わっている企業からの報告は、参加者の関心を集めた。仙台市の復旧に携わっている深松組の深松努社長は「防風林が津波に流され、流木で住宅の倒壊を導いた。流木が串刺しになった住宅が多く見られる」と被害を報告。また、丘陵地にある住宅が崩れ落ち、いまだ手つかずで残っている現状を語った。

実際の復旧現場に携わった経験から、瓦礫を取り除く重機の部材の手配や燃料の問題など、障壁となった事例も紹介された。さらに、瓦礫撤去に際し、当初は縦割り行政が能率低下を招いたため、窓口を一本化する「ワンストップ化」を実現させたことで復旧効率も向上したと語り、震災時のワンストップ化を推奨した。重機を用いて照明を確保するなど、日頃使用しているものを工夫することで避難所に貢献できることも示した。また、事前訓練の必要性や重要性が語られた。